The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞金水敏著『コレモ日本語アルカ？ー異人のことばが生まれるとき（そうだったんだ！日本語）』／金水敏編『〈役割語〉小辞典』／金水敏・田中ゆかり・岡室美奈子編『ドラマと方言の新しい関係『カーネーション』から『八重の桜』、そして『あまちゃん』へ』
Author(s)	依田, 恵美
Citation	語文. 2015, 104, p. 62-64
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70956
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

金水敏著『コレモ日本語アルカ?―異人のことばが生まれるとき（そうだったんだ！日本語）』／金水敏編『〈役割語〉小辞典』／金水敏・田中ゆかり・岡室美奈子編『ドラマと方言の新しい関係『カーネーション』から『八重の桜』、そして『あまちゃん』へ』

依田恵美

二〇〇〇年に金水敏氏が論文「役割語探究の提案」（佐藤喜代治編『国語史の新視点』国語論究第八集、明治書院）の中で、特定の人物像と密接に結びついた言葉遣いを〈役割語〉として提唱して以来、役割語研究は二〇一四年で一五年目を迎えた。この節目の年に、これまで氏が行ってきた役割語研究の成果が刊行された。それがここに紹介する三作である。

『コレモ日本語アルカ?―異人のことばが生まれるとき』は、中国人を表象する役割語〈アルヨことば〉を取り上げ、その由来と形成過程を明らかにするものである。以下に概要を示す。

序章では本書の目的を述べる。第一章では大正期に成立した宮沢賢治の「山男の四月」を〈アルヨことば〉の最古例として取り上げ、夢野久作の同時期の作品と比較しながら、当時の中国人観を探る。第二章では幕末から明治期にかけて横浜で用いられたピジン日本語について文献を調査し、〈アルヨことば〉の源泉が「Nankinized-Nippon」にある可能性を指摘する。第三章では「山男の四月」以降、日中戦争期にかけて〈アルヨことば〉と人物像の結びつきがステレオタイプ化していく過程を分析する。第四章では一九〇〇年代初頭の大陸において日本人と中国人がやり取りする中で生まれた「満州ピジン」を取り上げ、〈アルヨことば〉との影響関係を考察する。第五章では戦後のポピュラーカルチャーの中で〈アルヨことば〉がどのように用いられ、どのような人物像を担ったかを述べる。終章では中華人民共和国で作られた抗日映画・ドラマ等に登場する日本軍兵士が用いる、ステレオタイプ化した言語表現〈鬼子（クイズ）ピジン〉に触れ、〈アルヨことば〉と横浜のピジン、満州ピジンのそれぞれのつながりを総括する。また、「ある」語法の起源に関し、文献において「あります」語法が先立っていることを挙げ、必ずしも北京語の「儿（アール）化」や特定方言の「有」の使い方に起源を求めなくてよいとする。さらに、横浜でのピジン、満州ピジン、〈鬼子ピジン〉のいずれにも見られる「進上」に、中国からの輸入に始まり、日本から中国に輸出された歴史があることを述べる。

会話集や児童の綴り方など、さまざまな資料を根拠として〈アルヨことば〉の謎に迫っている。〈アルヨことば〉やピジンを用いた各時代の人々の営みに触れることのできる一冊である。

（岩波書店、二四六頁、一，八〇〇円＋税）

『〈役割語〉小辞典』は役割語に特化した世界で初めての辞典である。〈大阪弁・関西弁〉としての連語「あかん」から、〈大阪弁・関西弁〉〈田舎ことば〉〈上司語〉〈書生語〉〈老人語〉として

用いられる否定の助動詞「ん」まで、約一二〇語を収録する。各語について、結びつく人物像を〈宇宙人語〉〈女ことば〉のように山カッコで括って示し、言葉の意味のほか、文法や音声の面でどのような特徴が見られるかなどを解説する。また、役割語としての成り立ちや用法の変化について古典や小説、アニメ、流行歌などから用例を挙げて示しているため、読者は大まかな変遷を辿ることができる。本文中にはマンガの中の一コマや日用品の写真など、実際に役割語の使用されている図版が約四〇点付されており、視覚的にも楽しめる仕様になっている。

役割語は日本語母語話者の持つ共通知識を前提としている。しかし、日本語を母語とする人であれば誰でもが同一の知識を有しているというわけではなく、世代や生活する地域、文化などが異なれば、共通知識として持つ内容に相違が見られたり、そもそも知識を持っていなかったりすることもあり得る。その点において本書は、共通知識のおよその拠り所となるものを提示した初めての辞典でもある。今後、翻訳や創作、また、日本文化の理解に、新たな展開をもたらす一冊となろう。

（研究社、二七〇頁、二、〇〇〇円＋税）

『ドラマと方言の新しい関係『カーネーション』から『八重の桜』、そして『あまちゃん』へ』は、NHKで放送された連続テレビ小説『カーネーション』の「岸和田ことば」、同『あまちゃん』の「ニセ東北弁」、大河ドラマ『八重の桜』の「会津ことば」を題材に、研究者とドラマ制作者の二つの側から、ドラマと方言の関係に迫る。Part. 1とPart. 2の二部で構成され、Part. 1では言語学・方言学・ドラマ論の研究者がそれぞれ、ドラマ方言の役割を述べる。ことばの観点からは、ドラマで用いられる方言は〈役割語〉であり、伝わりやすさと方言の質という二つの軸のバランスが関わること、方言ドラマ史の観点からは、ドラマ等で用いられる方言が「ニセである」という批判を受けた時代から、方言指導を導入することでリアルさを追求する時代を経て、二〇一三年の『あまちゃん』ではヒロインが自己流の方言を話し、それを視聴者が好意的に受容する、「虚構の重層性」を楽しむ時代が切り開かれたこと、ドラマ批評の観点からは、『カーネーション』『八重の桜』『あまちゃん』ではヒロインのアイデンティティー形成と方言が密接な関係にあり、地元に対してどう関わるかによって、ヒロインがどのような方言をどの地で使い続けるかに違いの見られることが指摘される。Part. 2では、Part. 1での問題提起をふまえ、NHKのプロデューサー、および、ことば指導の担当者から現場の声を聞く。ドラマの中の方言とは現実のことばを再構成したものであり、方言としての正確さとわかりやすさの両立の下で用いられることや、人の距離感の濃淡を表すために取捨選択や調整の行われることが、『八重の桜』の中でヴァーチャル性を重視して用いられた台詞「鉄砲さ撃づ」などを例に語られる。中でも、視聴者の反応をふまえて視聴者と一緒にドラマを作っていくとする菓子浩氏のことばが印象的である。

ドラマ制作時の裏話も多々あり、朝ドラや大河ドラマのファンでなくとも、気軽に手に取り、楽しく読むことができる。

（笠間書院、一〇四頁、八〇〇円＋税）

（よだ・めぐみ　大阪産業大学非常勤講師）